

【国語】

実践事例：小学校 1 年生 / 実施機関：鳥取県教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

読みの困難

- ・形がとらえられない。
- ・似た文字を読み間違える。
- ・同じ行を読む。
- ・行ごと読みとぼす。
- ・どこを読んでいるか分からなくなる。

書きの困難

- ・思い浮かんだことが書けない。
- ・書くこと自体が思い浮かばない。
- ・教科書から探し出せない。
- ・ひらがなの定着が不十分。

【指導例】

1. 対象とした児童の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害）の疑い
 ADHD（注意欠陥/多動性障害）の疑い その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
 学習（計算、推論等）すること その他

- ・入学当初、多動で離席や教室からの飛び出しがあり、学習に取り組むことが難しく、2学期までひらがなは正しく読めなかった。
・読めないために書くことの苦手さもあり、文字を介してのコミュニケーションや情報処理ができない。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期（T式ひらがな音読確認検査）

- 第1回 6月中旬から7月上旬
第2回 10月中旬から11月上旬
第3回 1月下旬から2月上旬

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

研究指定校において担任、教務主任、級外の教員が連携をして、年間3回T式ひらがな音読確認検査を実施した。

- ・第1回 直音連続読み（要支援：1分間で読み取る文字数が54文字以下）
- ・第2回 直音連続読み（要支援：1分間で読み取る文字数が70文字以下）
単音連続読み（要支援：未習得文字数6文字以下または時間63秒以上）

- ・第3回 単音連続読み（要支援：未習得文字数9文字以下または時間67秒以上）
単文音読（要支援：時間35秒以上）

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・ひらがなが正しく読めない。
- ・注意集中が難しく、授業に集中できない。
- ・書きたい意欲はあるが、文字を想起して書くことができない。

(2) つまずいている背景・原因の可能性

- ・文字が読めない・・・不器用さ・視覚認知の問題・注意集中の課題により学習したことが蓄積されない。
- ・注意集中の課題・・・注目すべきことへの集中の持続が難しい。
- ・LD（読み書き障害）

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

全体指導（ユニバーサルデザインの授業づくり）

- ・挿絵を手がかりに内容理解を促す。
- ・動画を視聴したり、実物を触ったりして言葉のイメージを持てるようにする。
- ・大型画面でワークシートを提示してやり方を説明する。
- ・教材文を提示して、常に見える形で学習を進める。
- ・教材文で出てくる言葉を大型画面に提示して、読む練習を行う。

個への指導

- ・タブレットで1日1回5分間、連続21日間のT式ひらがな音読支援アプリによる音読練習を1学期から夏休みの期間と2学期の期間の2回実施した。
- ・イラストつきのひらがな五十音表を手元に置いて、読み書きの際、想起しやすいようにする。
- ・書きたい内容を話させ、支援者と一緒に内容を整理してから書く。
- ・ワークシートの枠に色をつけて板書と一致させ、書く項目が分かりやすくする。
- ・グループ発表など場を工夫して、苦手な活動に取り組めるようにする。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

授業開始前の10分間の帯時間で個別に語彙指導を行った。

(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容および授業の評価）

変容としては、ひらがながまったく読めなかった児童が、最終的に53個読めるようになったことが挙げられる。もともと参加意欲はあったが、できないことが多くて、集中が続かない状況から、多動衝動性が目立っていた。それが、文字が読めるようになり、授業中できることが増えたことから、離席をしなくなったこと、学習中の友だちとのやりとりが増え、周囲から認められる声かけが多くなり、自己肯定感が高まった。また、個別に帯時間で語彙指導（言葉をまとまりで読む練習）を行うことで、学習への意欲はさらに高まった。

【体育】

実践事例：小学校1年生 / 実施機関：鳥取県教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

- ・話者に注目し続けることが難しい。
- ・学級・学年集団の中で指導者の話を聞くことが難しい。
- ・語彙が大変少ない。
- ・一斉指示・言語指示で活動内容・方法を理解することが難しい。
- ・多様な運動や遊び・生活の体験不足。
- ・ボディイメージが確立しておらず、運動模倣が苦手。
- ・リズムがとりにくい。
- ・年齢相応の運動発達に達していない。
- ・身体の動かし方が不器用。粗大運動・微細運動共に不器用。握力も弱い。
- ・目・手・足等の協応動作がうまくできない。
- ・運動遊びを工夫したり、生活の中で広げたりすることが難しい。
- ・友達と協力して話し合ったり、イメージを広げたりすることが難しい。

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ADHD（注意欠陥/多動性障害）

その他

(2) 子供の困難さ

見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと

コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること

落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること

学習（計算、推論等）すること その他

- ・本児は、喘息・アレルギー・抗生物質治療ができない等身体面への注意・配慮が必要で、母親は大変過敏になって育児をされていた。就学前にも入院したり、インフルエンザが流行すると長期にわたり保育園を欠席したりする等、保育園を転園したり長期間欠席したりして集団保育の体験が大変少ない。
- ・集団保育の経験が少ないことから社会性、ルールの理解・行動が育っていない。
- ・木の枝や棒を見つけては振り回すことが多く、他児とのトラブルが多かった。
- ・母親の心配から外遊びはもちろん、日常生活の体験そのものが大変限られており、運動面の発達が大きく遅れ、粗大運動・微細運動・協調運動等不器用である。
- ・人物画も1学期は頭足人（頭や顔に直接手足が描かれている人物画）にもなっていなかった。
- ・母親との会話も多くはなく、身近な物の名前も知らないことが目立つほど語彙が少ない。
- ・一斉指示では理解できないことが多く、担任が後で個別に指示をする等の支援が必要である。
- ・文字の読み書きも難しいので、級外教員の取り出し指導を受けている。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

- ア. 平成30年3月 移行支援会議
- イ. 平成30年4月～ 入学後の学校生活・体育科の授業の様子観察
- ウ. 平成30年5月 運動会練習における運動の様子観察
- エ. 平成30年6月 新体カテスト・倉吉市運動機能実態調査
- オ. 平成30年9月～ 体育科の授業における事前調査、授業後の変容の累積

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

- ア. 移行支援会議
 - ・平成29年度管理職、1年生担任、特別支援教育コーディネーターが参加し、児童が在園していた保育園から、児童の実態・支援方法等について聞いた。
- イ. 学校生活全般及び体育科授業における様子の観察
 - ・担任及び特別支援教育支援員が学校生活における全般的な様子、コミュニケーション能力、学習中の様子、理解力等本児の様子を観察し、適切な指導・支援を考える。
 - ・体育科の授業において、運動能力、身のこなし、模倣、集団での活動、意欲、工夫、日常生活への般化等について観察した。
 - ・ニーズに応じた指導・支援に取り組み、評価しながら次の授業に生かした。
- ウ. 運動会練習時の観察
 - ・担任・級外教員・特別支援教育支援員等により、運動場での整列、行進、短距離走、ダンス、各競技等の練習等を通して全身の運動能力、模倣、身のこなし等の観察、指導を行う。
- エ. 新体カテスト
 - ・担任・同学年担任・級外教員・特別支援教育支援員により、握力・上体起こし等各種目を実施する様子の観察、記録から本児の運動能力を評価した。


オ. 倉吉市運動機能実態調査

- ・担任・教科指導スーパーバイザー・指導主事による調査を実施し、倉吉市子ども家庭課児童指導員・鳥取県LD等専門員・スーパーバイザー・指導主事により結果分析を行った。


【倉吉市運動機能実態調査】

別紙3「実施方法」


①歩く・止まる 前進し、指導者の笛で止まる
②走る・止まる ゆっくり走っており、指導者の笛で止まる
③腕の交差・回旋 外腕→内腕→外腕→内腕
4拍×4



④片足立ち 左右どちらでも構わない（立ちやすい方で）




⑤スキップ 連続してスキップをする
⑥鉄棒ぶら下がり 低い鉄棒なら足を曲げて実施する




⑦運動模倣


ア. 両腕の横上 4拍で1回




イ. 両腕の横上 4拍で1回




ウ. 両腕の前出 4拍で1回



エ. 両手の交互開閉 交互にグーパーを8回



オ. 両耳の交差把握



学校生活の基盤となる運動の実態調査を実施

- ・「腕支持」（鉄棒ぶら下がり）
- ・「歩く止まる」「走る止まる」
- ・「腕の交差」「回旋」
- ・「片足立ち」
- ・「スキップ」
- ・「運動模倣」

継続時間、回数、運動の様子を評価し、個人、各学校、倉吉市の傾向をまとめた。

カ. 体育科の授業における事前調査、授業後の変容

- ・担任・特別支援教育支援員等が、各単元の指導に入る際、関連した運動の実態を簡単な動きから把握した。また、学習に関する意欲については、聞き取りやアンケートを実施した。
- ・授業中の様子を観察したり記録用紙を活用したりするなどして、評価基準に照らした評価を積み上げた。観察した児童の変容の様子については、次時や次単元の活動に生かすようにした。

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ア. 一斉指示をする指導者に注目し続け、指示内容を聞いて話の内容を理解し、活動に取り組むことは難しい。
読字が苦手で、学習内容が表示されても文字を素早く読み取ることが難しい。
- イ. 取り組む運動をスムーズに身に付けることが難しい。
- ウ. 指導者や友達の演技を模倣することが難しい。
- エ. 友達と話し合っ、運動を工夫したり、イメージを広げたりすることが難しい。

(2) つまずいている背景・原因

幼児期には、喘息・アレルギー体質から入院したり、保育園を欠席し続けたりしている。また、母1人子1人の家族で、母親の育児不安も大きく、外遊びはもちろん室内でも体を大きく動かして遊ぶ体験が非常に少ない。現在も体調を崩すと長期欠席につながるのではないかと不安は続いており、家庭での外遊びは少ないままである。そのため年齢相応の運動発達に達していない。

集団生活、集団遊びの体験が少なく、社会性が育っておらず、ルールを守らなかったり、棒を振り回したりする等友達と楽しくコミュニケーションをとる方法が身に付いていない。

母子の会話が少なく、保育園での活動体験も少ないことから語彙が乏しく、身近な文房具等の名前も知らない。また文字への関心が低かったのか、文字の読み書きができず、1年生2学期にもたどたどしい読みしかできず、単語や文章を理解しながら読み進めることは難しい。

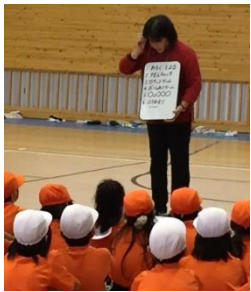
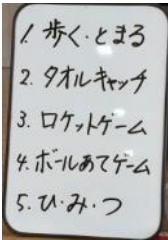
(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

「ボールなげゲーム」を通して


(i) 授業における全体指導、個への指導について

<全体指導について>

ア. 一斉指示における配慮・個別支援

		<ul style="list-style-type: none">・話を始める前に、全員に注目するよう声をかける。・特に支援の必要な児童のそばに立つ。・学習内容が書いてあるボードを活用し、分かりやすく、簡潔に話す。・ボードはステージに置き、いつでも確認できるようにする。
--	--	---

イ. 継続して「体づくり運動」に取り組む

	<ul style="list-style-type: none">・6月の運動機能実態調査で「歩く止まる」、「走る止まる」が共にできなかった児童が2名(55名中)いた。うち1名は対象児童であり、腕交差・回旋、運動模倣、スキップができなかったため、9月から継続して体育の授業の始めに「体づくり運動」に取り組んだ。
<ul style="list-style-type: none">・「歩く止まる」、「走る止まる」の運動では、「笛が鳴ったら止まる」という意識が強くなり、徐々にスムーズに止まることができるようになった。	

ウ. 「投げる」動作づくり



- ・6月に実施した新体カテストの「ソフトボール投げ」の結果が悪かったので学年全員で「投げる動作」づくりから取り組んだ。
- ・「投げる手は頭の後ろ」「反対の手は発射台」等、児童に分かりやすい言葉を選び「投げる動作」を示した。



- ・タオルなどの身近にある道具を使って、全員一斉に繰り返し練習を行った。

エ. 教材の工夫



- ・「投げる」体験を増やしたり、動作を身に付けたりするために教員が「ロケットゲーム」を考案した。



- ・個々の児童がバトンを飛ばした飛距離を確認できるように、紐に1m間隔で赤いビニルテープを貼った。

オ. 関心・意欲・評価



- ・副読本や記録用紙を活用し、児童自身の変容を意識できるようにした。学習に対する成就感と次の学習への意欲を高めることができた。



- ・自身の活動の様子を振り返ったり友達の活動の様子を発表したりすることをおして、次の授業や単元への意欲を高めることができた。

<個への指導について>

ア. 活動についての指示

- ・対象児童を適宜声かけが可能である教員の近くに配した。
- ・簡潔な言葉とホワイトボードによる視覚的支援を行い、対象児童が理解しやすい支持を心がけた。
- ・担任以外の教員についても、担任と同じホワイトボード等を使用し個別に声かけを行った。

イ. 「投げる」動作づくり



- ・投げる動作が定まらない対象児童に対し、順番待ちをしている時間を利用し教員と一緒に動作の確認をした。
- ・動作確認の際には、児童に分かりやすい言葉を用いて動作のポイントとなる部分を伝えた。
- ・できている箇所をしっかりと賞賛し、意欲の向上を促した。

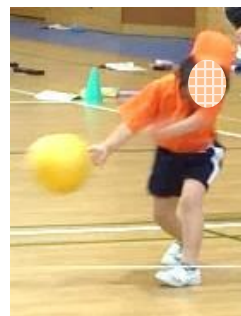


- ・練習を重ねた結果、徐々に動作が定着し、身体支援が減少し、言葉による支援が増えた。

ウ. ボールなげゲーム



- ・実際にボールを投げる前に、ボールを持たずに「投げる動作」の練習をし、ボールを持った時にスムーズに投げることができるよう支援した。



- ・対象児童にはやや大きいボールで投げにくそうだったため、小さいボールも準備する等の配慮が必要であった。
- ・的を狙って投げるよう指示したが、なかなか思う所に投げられなかった。力の入れ方等、指導の工夫が必要だった。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

- ・体育科における取り出し指導、通級による指導は実施していない。

(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容および授業の評価）

ア. 児童の様子や変容

- ・多様な運動に取り組むことによって、体を動かす運動遊びが好きになり、休憩時間は外で遊ぶことが多くなった。
- ・1学期は棒を振り回したり、友だちを叩いたりすることが多かったが、集団での活動を楽しむことによりコミュニケーションの取り方が上達した。ドッジボールでは、友だちにボールを譲る場面も見られた。
- ・友だちのボール投げの姿を見て「ぼくも〇〇さんのようにかっこよく投げたいです」と発表できるようになった。
- ・ロケットゲームの記録が伸び、対象児童が意欲を持って練習を続けた。
- ・「歩く止まる」「走る止まる」ができるようになり、「笛が鳴ったらすぐに止まろう」という意識が高まり、集中して運動に取り組むようになってきた。
- ・「ロケットがよく飛ぶようになった」「ボールが上手に投げられるようになった」と達成感が持てるようになった。それにつれ、指導者のアドバイスを聞こうという姿勢もできてきた。
- ・タオル投げ、ロケットゲームでは「投げる動作」も少しずつ安定してきたが、ボール投げではまだ手と足がバラバラになり、動作を作るための支援が必要である。
- ・運動が好きになり、外遊びが増え、体力がついてきた。寒くなっても大きく体調を崩すことがなく、欠席せずに3学期を過ごすことができた。

イ. 授業の評価

(ア) 成果

- ・新体力テスト、運動機能実態調査等から把握した児童の実態を元に、「前の自分より記録を伸ばし、みんなで喜び合う」ことを目指して授業を組み立てた。ロケットゲームの記録の伸びや、ボールでの的のカラーコーンを倒せた喜び等が意欲につながった。
- ・「タオル投げ」「ロケットゲーム」「ボールの的当て」「ドッジボール」と同じ活動を繰り返す事により、子供達の気づきや上達があり、「投げる」力が伸びてきた。
- ・まだボール投げに課題のある児童もいるが、授業の振り返りの中で、他の児童から「きれいな動作で投げることができた」と伝えられ、達成感・喜びを感じた児童が多かった。
- ・オーバースローの投げ方を分析し、動作のポイントを言語化したことは子供達に受け入れやすかった。
- ・学年担任団と特別支援教育支援員が授業に関わっているが、日頃からの連携により、また児童の実態をよく把握しているため、スムーズに支援をすることができた。
- ・新しい体育館で制約が多かったが、自作教具や指導者・児童の工夫により、楽しく、効果的な授業を組むことができた。

<課題>

- ・授業前半は全員が運動するが、後半はロケットやボールが回ってくるのを待つことになり、運動量が少なくなってしまう。全児童の運動量を確保する工夫が必要であ

る。

- ・ ボールなげゲームでは、クラス毎に2グループに分かれて活動したが、児童のタイプ別（コツをつかむと技能が上達するグループ、繰り返し練習することが必要なグループなど）のグルーピングの工夫が必要だと考える。
- ・ 評価については十分に検討することができなかった。担当者だけでなく、学校体制で検討していくことが大切である。